教育最前線　連載33

●Hondaの福祉関連安全運転教育プログラム

病院と交通教育センターが連携して、リハビリテーション中の方を支援

ホンダは「より多くの人にクルマを操る楽しみを提供したい」「交通社会に参加するすべての人の安全を守りたい」という理念を実践するため、身体の不自由な方や障がいを克服し、クルマの運転を通して社会復帰をめざす方の支援を進めている。具体的には「リハビリテーション向け運転能力評価サポートソフト（6面参照・以下、サポートソフト）」のシミュレーションと、実車による「自操安全運転プログラム」との併用により、運転復帰を支援している。

「自操安全運転プログラム」では安全運転に必要な基本行動を実車走行によって受講者に確認してもらう

患者様の運転復帰を支援する専門チームを発足

熊本セントラル病院（熊本県菊池郡大津町）では、運転復帰を希望するリハビリテーション中の方の能力評価の参考とするために2012年から交通教育センターレインボー熊本で「自操安全運転プログラム」を活用している。同病院通所リハビリテーション事業所・訪問リハビリテーション事業所・作業療法士の内田智子さんは「それまで私たちが対応できたのは、運転復帰を希望する患者様に机上のテストや停止したクルマの中での評価結果をお伝えし、運転免許センターでの適性相談や自動車教習所での講習を勧めるところまでした。2年前、交通教育センターレインボー熊本で実車による自操安全運転プログラムの評価を開始したところ、患者様からの強いニーズを感じました」と話す。

そこで同病院は、まず今年5月にサポートソフトを病院内に導入。患者様から「運転したい」という声が上がった時、すぐに簡易的な評価ができるようにしたのである。そして、一定の評価結果が得られた方には「自操安全運転プログラム」を受講してもらうという流れを構築した。その後、6月には理学療法士、作業療法士、言語療法士の10名のスタッフで構成される運転支援チームを発足。チーム内で情報とノウハウを共有することで、全員が運転評価できるようにすることをめざしている。

今年6月に発足した熊本セントラル病院・運転支援チームの皆さん

「これまで運転支援は入院でのリハビリを終え、退院して『生活のためにはクルマの運転が必要』『運転したい』との希望が出た場合に、支援を行っていました。これは入院中にリハビリされる方の多くは、身体の機能を回復させて退院することを目標にされているため、患者様もスタッフも、退院された後の生活に意識が向きにくいからです。入院のリハビリを担当するスタッフにも運転支援の理解を深めてもらうことで、早期から患者様の退院後の運転の必要性、希望を把握し、対応が可能になりました」と、内田さんは説明する。

実車を運転することで不安が楽しさに変わった

熊本セントラル病院を利用して運転復帰をめざしリハビリ中の坂本さん（20歳）は、サポートソフトによる評価を受け、実車でのトレーニングへ移行。5月30日に交通教育センターレインボー熊本で「自操安全運転プログラム」を受講した。坂本さんは「病院の方から運転の練習ができる機会があると聞いて、ぜひやってみたいと思いました」と話す。

この日は黒澤明良インストラクターが助手席に同乗し、同センターのコース内でのトレーニングとなる。坂本さんは右手・右足での運転操作が困難であるため、トレーニング車両に運転補助装置を付け、ウインカーレバーやアクセルペダルを左手・左足で操作できるようにしている。正しい運転姿勢を確認し、慣熟走行へ。坂本さんが左手・左足での運転操作に慣れてくると、ブレーキングやパイロンスラロームへと進む。ブレーキングでは決められた速度で直線を走行し、指定されたパイロンに合わせて停止する。パイロンスラロームでは一定の速度を維持しながら、ジグザクに配置されたパイロンの間を通り抜ける。最後に車庫入れにチャレンジして、約1時間にわたるトレーニングが終了。

「始めるまでは不安でしたが、今はとても楽しい気分です。運転することへの自信も持てるようになりました」と、坂本さんは笑顔でトレーニング車両から降りてきた。「最後は、以前の運転感覚を思い出してきているように感じました」と黒澤インストラクターは評価する。

運転支援は自立支援のためのツール

その後、9月4日に坂本さんは2回目を受講した。前半は1回目の内容の振り返り。後半は交通教育センター周辺の一般道路を走行する。助手席には黒澤インストラクター、後部座席には坂本さんの両親が同乗した。

「私は右目の視野が狭くなっているので、交差点の左折に比べて右折は難しく感じました。これからは練習を通じて、そうした点をカバーするための運転を身につけたいと思います」と、坂本さんは路上での運転にも手ごたえを感じている。同乗した坂本さんの父親は「前回と比べると、進歩していることが確認できました。今後は間隔をとらずにトレーニングを継続させられるようにしたい」と話す。

トレーニング車両に取り付けられた左手・左足で操作するための運転補助装置

また、この日は熊本セントラル病院でリハビリを行っている髙橋さん（61歳）も「自操安全運転プログラム」を受講。髙橋さんはこれが1回目で、坂本さん同様、運転補助装置で左手・左足で運転操作を行う。「初めて左足でアクセルとブレーキを操作したので、最初のうちは踏み加減がわからず苦労しましたが、安全が確保された場所を走るのでリラックスして練習できました。だいぶ慣れてきたので、練習を重ねればスムーズに運転できそうです」と感想を語ってくれた。

熊本セントラル病院の内田さんは「熊本県は公共交通機関が充実していない地域もあり、坂本さんのような若い方は自分でクルマの運転ができないと就職などに制約を受けることになります。ですから、運転復帰への可能性はできるだけ残してあげたい」という。「病気になると何もかも諦めてしまう患者様は少なくありません。それは諦めるように自分で自分に言い聞かせようとするから。心の底では運転したいと思っていても、周囲に言い出すことができない。そうした考え方を変えてもらうことが私たちの役割だと考えています」。熊本セントラル病院では、運転支援を自立支援のためのツールの1つとしてとらえ、取組みを推進している。

ホンダは交通教育センターを通じて病院など医療機関との連携を深め、運転復帰に向けてリハビリ中の方々を支援していきたい考えだ。

交通教育センター内ではパイロンスラロームや狭路走行、車庫入れを繰り返し、基本的な運転操作と車両感覚を身につける

交通教育センターのコースで一定の評価を受けると、路上でのトレーニングに移行

Hondaの「自操安全運転プログラム」に関心をお持ちの医療機関、福祉団体の方は下記にご相談ください。
本田技研工業（株）安全運転普及本部　TEL：03（5412）1736